

寓話「ノコギリヤネのつくる星座のまち」

(断章“ノコギリヤネのある風景”番外編)



▲ノコギリヤネ星群

のこぎりニは、今夏開催の国際芸術祭「あいち 2022」(7.30～10.10)の主要会場のひとつとなっている。参加アーティストの一人である遠藤薫氏は、3月から、のこぎりニで制作を始めており、先行的に個展やイベントを展開されている。

その制作活動の一環として、昨夏から一宮の「リサーチ」を始められ、一宮 CATV (ICC) のインタビューにおいて、そのリサーチを踏まえて、「一宮は星座のまち」と語っている。七夕はじめ関連するものがまちの中にあるというという意味合いであったと思う。

アーティストは、時に私たちには見えないものを見せてくれる。「星座のまち」には、私たちが七夕などから連想する以上のもの、そして、このまちの未来を考える問題提起が潜んでいると思う。

かつて「ノコギリヤネのある風景」で、一宮に残存する 2,000 余りのノコギリヤネを星に喩えたことがある(その2、その6)。のこぎりニの上空の夜空にはノコギリヤネ星群。今回、遠藤氏が発した「星座のまち」のフレーズによって、思いがけないノコギリヤネの星空探索へと誘われた。

ノコギリアン (神奈川県藤沢市在住ノのこぎりニにノコギリアン・コウバを開設)

●ノコギリヤネの「迷い人」

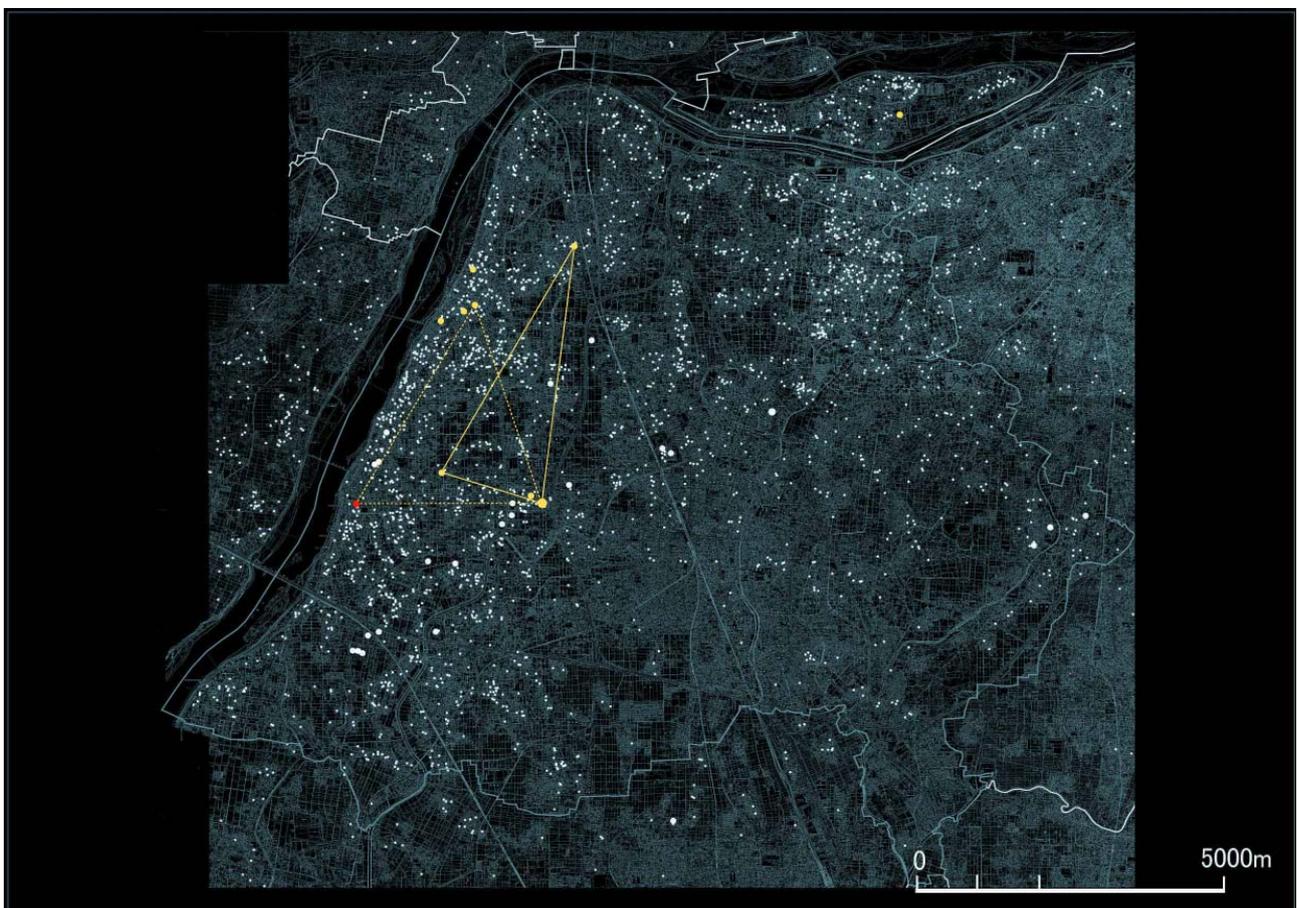
日の沈みかけた夏のある日、一人の青年がノコギリヤネに迷い込んできた。その「迷い人」は、暫くの間、あてもなく歩き回っていたが、やがて一枚の「地図」の前で足を止めた。

「不思議なところだな、ここは。あの蛇は舞台セットだろうか。向こうでは、動物の皮をなめしているのか。古い織機もあった。そして、これは地図なのか。タイトルにはノコギリヤネ星図とある。無数の白い点の中に、幾つかの黄色と赤の点。それらを結ぶ二つの三角形…」

青年には、紙に印刷された時代遅れの地図らしきものが懐かしく感じられた。昔、母方の叔父が、このような「絵」のような地図をよく見せてくれた。その叔父は、都市計画を仕事にしているとっていたが、そんな絵を描くことが仕事になるのか不思議だった。

不意に、後方から語りかける声があった。

それは、このまちに残っているノコギリヤネを地図上に落としたものだ。この工場の主が作ったものだ。ノコギリヤネというのは、昔、全国いたるところにあった三角屋根の工場のことだ。役割を終えたノコギリヤネを「ウツホ（からっぽ）」と呼んで、星に喩えて「星図」をイメージしたらしい。この地図に記されたノコギリヤネの数はおよそ2,600。かつてこのまちに存在したノコギリヤネは、6,000から8,000と言われている。肉眼で実際に見える星の数は、4,000から5,000ぐらいだから、まさに「星の数ほど」あったと言えそうだ。



▲ ノコギリヤネ星図

●ノコギリヤネがつくる「星座」

「迷い人」は振り向いたが、そこには誰もいなかった。どうやら、その声は、近くの柱に架けられた葉っぱで覆われたような仮面から発せられているようだ。しかし、驚きも恐怖も感じなかった。ここに迷い込んだ時から、何か不思議なことが起こりそうな予感があった。むしろ気持ちが落ち着きさえてきた。

オレは、ここでは「マレピト」と呼ばれている。オマエと同じ「迷い人」みたいなものだ。ここがまだ織物工場だったころだから、かなり昔のことになる。オレはこの世ではカタチを持たない。だから、この仮面を通して対話している。

そして、マレピトの仮面は、「迷い人」の疑問に答えるように「星図」について話を続けた。

三角形は、まさにノコギリヤネのつくる「星座」だ。二つの三角形が重なる頂点に位置するノコギリヤネがこの場所だ。ここがオマエのような「迷い人」にも開かれているのは、この若いオーナーが始めた「のこ座」という集まりからだ。その記念すべき第1回の主役たちが、三角形を構成するノコギリヤネだ。(のこ座 1103 備忘録「ノコギリ屋根には鬼が棲む」)

もう一つの破線の三角形は、廃業したノコギリヤネの織機(ジョンヘル)がここに移され展示されているが、その所有者は別のノコギリヤネで、自社機械の部品の補修に活用するという三角関係を形成している。(ノコギリヤネのある風景・その11)

その赤いノコギリヤネは消滅したが、代わりにジョンヘル機が星座の一角を構成する。実際、いま見えている星の中には、すでに消滅している星もあるだろう。

そうか、オリオン座のペテルギウス(左肩に位置する赤い星)が超新星爆発で消えるような話を聞いたが、星は消えてもオリオン座は残る。まちを構成する様々な要素がいろいろな関係を築いて星座を構成する。それは物語が生まれるということ。そして、その関係は、消滅したものや死者を含めて作られる。「まち」の未来は、過去を織り込むことで生きてくる。ノコギリヤネから見えてくる未来、それが「星座のまち」ということだろうか。

この地図の制作者は、地図で「ふるさと」を残したいらしい。そして、いろいろな地図を描いている。死者を含めた記憶が土地に刻まれ、そこから「生きる力」が生まれる。それが、ゲニウス・ロキ(地霊、土地の守護神)と呼ばれるものだ。(ノコギリヤネのある風景・その7)

●ノコギリヤネの出口

さて、迷い人よ、出口は見つかりそうか？

オマエのような「迷い人」は、ここに自身の出口を求めて彷徨いこむようだ。そして、何かを見つけて出て行く。それは出口ではなく、入口となるのだけれどな。

それは、どういうことだ？

マレピトからの返答はなかった。青年は、あらためて「星図」を見た。

「ノコギリヤネがつくる星座のまち」か。振り返ると、奥に出口らしきものが見える。「迷い人」は、外に出た。すっかり日が暮れており、空には満天の星が輝いていた。

「久しぶりに見たな、こんな星空を」
とにかく前に進んでみようと思った。「生きる力」を感じていた。



ノコギリヤネ・コウバには、来訪者が書き記したと思われる一枚のメモが置かれていた。
「この地域は、木曾川両岸のノコギリヤネが新たな関係性を築くと面白くなりそうですね。木曾川の岐阜県側エリアをもう少し広げた方がいいように思いました」

「その通りだよ。でもね、それほど簡単じゃないんだよ、境界を超えるのは。たとえ地図という虚構の世界でも」

「まれびと」は、民俗学者の折口信夫が「共同体の外部から来訪する神」として提唱したものである。ワタシのノコギリヤネ・コウバは「マレビト」（サカオケンジ作）に見守られている。ワタシ自身も「迷い人」である。遠藤薫氏はじめ「あいち 2022」のアーティストはまさに、まれびと的存在である。その作品には、社会、一宮に対する様々な視点が提示されると期待している。

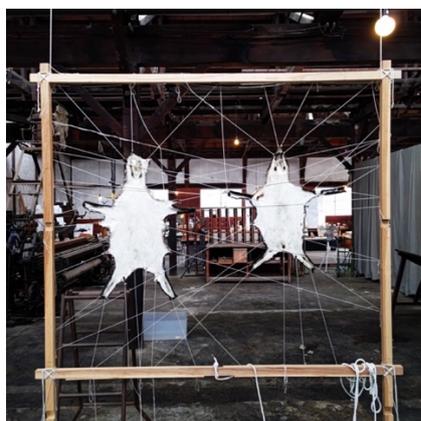
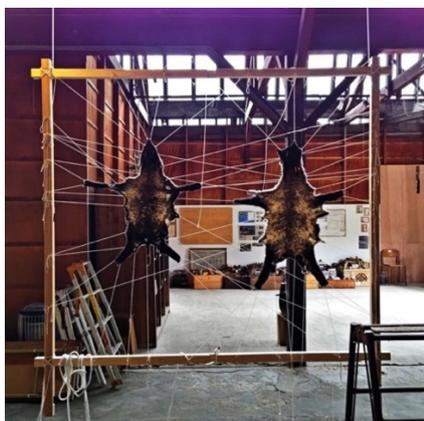
遠藤氏は、「のこぎりニ」での制作過程で、二匹の子羊を解体されている。まさに「贖罪の羊」だ。毛織物による繁栄（いや、全ての繁栄）は、多くの犠牲の上に成り立つものであろう。丁寧に骨を磨き、皮をなめす。「まれびと」だから成し得ることである。

作品は一宮市豊島記念資料館で展示されるらしい。それは、真清田神社界隈の三八市が隆盛した構図でもある。流通の中心地域と生産の周辺地域。あるいは一宮カラスと木曾川トンビの攻防。

一宮は星座のまち。夢あふれる魅力的なフレーズである。耳障りの良さに、一宮の人たちは喜ぶだろう。しかし、ことばは両義性を持つ。共同体の外からやってくる「まれびと」のことばは、どのように届き、どのように受け止められるだろうか。

仕事場から外に出て七夕の空を仰ぎ見る。時刻は午後7時7分。明るさのせい、雲のせい、まだ星は見えないが、南西の空に、真っ二つに割れた綺麗な半月が昇っている。

2022.7.7（小暑・温風至／しょうしょ・あつかぜいたる）



「贖罪の羊？ 双子羊座？」